

こゝで之を米雨に綯纏せんが爲には第一に資本家の自覺を促さねばならぬと考へた。と云く資本家の陥り易い偏見は、賃金を與へれば主人であり之を受ければ家來であると言ふやうな封建的の觀念である。……資本あつての事業、事業あつての労働であると同時に、労働あつての事業、事業あつての資本である。資本と労働との共同活動が即ち産業である。賃金を與へる者貴くば労働を與へる者も同じく貴い。否、其の孰れも與へるのではない、資本と労働との持寄りに外ならぬのである。更に適切に言へば、資本家と労働者との人格的共働が即ち産業である。労働者の癖に怠けたるか、使用人の癖に反抗するとか、つまり此の「癖に」といふのが根本の誤りである。此の陋習の打破、即ち資本

家の自覺が第一だと私は考へたのである。

第二は労働者の自覺である。此れは資本の作用に就ては同様であるが、労働の根本意義は社會奉仕である。社會の必要とする物資を生産して社會に貢獻する、之を爲すには資本と労働と協力しなげればならぬ。労働者が資本家に對して僻んだ考を持ち、徒らに人を敵視するか又は自己の便益のみを謀つて資本家を敬愛することなげれば、即ち社會奉仕に悖るるのであつて、其極自ら卑められたのである。此の正當なる思想から十分の箝制と訓練とによりて労働組合を組織して、誠實な態度を以て漸次に之を發達せしめて資本家の信用を得、此の機關に依つて資本家との協調を保つて行くと云ふに努めねばならぬ。私は斯く希望したので、曾つて